

## 資料館だより

Vol.42 No.1 (通巻214号)

2017.6.25(年4回発行)



薬研



『廣益本草大成』 岡本為竹著



薬箆箱



薬さじ



薬袋 (左から、丸薬、粉薬、膏薬)

印籠



薬効能書



配置薬箱

## 寄贈資料の中から 薬に関するもの

今回は、資料の中から薬に関するものを紹介します。薬は太古から経験の積み重ねによって見出され、研鑽されて生まれました。5世紀ごろに新羅や百済から医学が伝えられ、奈良時代には鑑真により、本草学という薬物の学問がもたらされてから、薬の研究は発展し、盛んに行われるようになりました。

『廣益本草大成』は、江戸時代中期の医師が著した書物で、難解な医書をわかりやすく書き直しています。また、図や和名・異名、自説を掲載するなど工夫もこらされています。

薬研は薬剤を粉碎するものです。円盤状の薬研車についた軸を両手に持ち、舟形に溝のついた器具の中で、回転させながら前後に往復させて使います。

薬さじは薬を調合するのに使われます。材質は主に真鍮製で、すくう部分が両端についたものもあります。

薬箆箱は、薬屋や医師が、薬などを分類して保管するためのものです。引出しが細かく分かれているのが特徴で、引出しの表には薬品名を記した紙を貼りつけておき、粉碎した薬剤を紙袋などに入れて収納します。

薬袋は紙包みから発展してできたものです。袋には薬名や屋号、効能などが印刷されています。その後、効能書を別に刷って袋に入れるようになりました。また薬を服用する際は、薬草を煎じるのが一般的でしたが、江戸時代には丸薬が作られるようになりました。

印籠は小型の容器で、もとは印と印肉を入れるものでしたが、後に薬入れとして使うようにもなりました。

配置薬箱は置き薬とも呼ばれます。これは、薬の行商人が家庭を訪問し、各種の薬が入った薬箱を預け、次の訪問時に消費された分の代金を回収して補充するしくみで、江戸時代中期から全国に普及しました。

## 駿河湾の漁

## 金指 貢さんの漁話

## 網組長宝組の漁法(4)

## サンマ揚線網・カイラ網・シラス網

## ・サンマ揚線網

サンマ揚線網は網組長宝組の漁法(1)で説明したトイシキを小さくしたような形の船曳網です。小規模なため長宝組では二組のサンマ揚線網を操業していました。

サンマが黒潮に乗ってやってくる5月の初め頃がサンマ揚線網の一番盛んな時期でした。サンマが来る年はマグロがたくさんやってくると言われており、サンマ揚線網で漁に出た時にマグロがやってくるのを見てマカセ網に切り替えたということもありました。

昭和25年頃まではサンマ揚線網を日中に行っていたのですが、それ以降は夜間にヒブネ(灯船)を使って巾着網でサンマを捕るようになったので、サンマ揚線網は行われなくなりました。

漁の行い方はマカセ網と同じでハツドウキ(動力運搬船)でアンブネ(網船)を曳きながら網の奥の魚捕りで魚を捕らえます。アンブネの方からサンマが逃げていかないよう、石を投げたり、笹で海面を叩いて脅しを行っていました。

昭和12年頃、沼津の魚市場でサンマ1本が1円で取引されました。当時、幼少の金指さんはよく魚市場に連れられて行き、サンマを数える手伝いをしていました。

## ・カイラ網

カイラ網は網組長宝組の漁法(3)でも少し触れましたが、4月～5月にカツオ一本釣りのカツエサ(活餌)となるイワシのシンコ(幼魚)を捕るための網です。静浦地区では音戸(おんど、広島県呉市)から伝わったことからオンド網とも呼ばれました。この網は大正時代からあった網で昭和30年頃まで使われていました。

マカセ網と同じように船曳網ですが、操業の仕方が少し異なります。他の船曳網が海の表層を網で曳いて

揚げていきますが、カイラ網は浜辺の方へ海底を擦るように曳き寄せていきます。浜から曳き寄せて陸上で揚げれば地曳網ですが、カイラ網では船上に網を揚げます。網は海底近くを曳くことになり、岩場だと網を傷めてしまうため、砂浜が続く所が漁場として選ばれました。

カイラ網の構造は300間※(約450m)ぐらいのナアミ(垣網)にオアミ(脇網)がつき、中央に魚捕りとなる50間(約75m)ぐらいのフクロ(袋網)がつきます。フクロの入口にはカンタ(樽形の浮子)を一つ取りつけ、オアミのアンバ(浮子)を強くすることでフクロの入口から先端にかけて沈むようにします。オアミとナアミの裾にはイヤイシ(石の沈子)がつき、オアミの合わせ目にはイヤイシよりも大きなオオイヤを取り付けます。

## ・シラス網

シラスはイワシの仔稚魚で、カイラ網で捕るイワシのシンコよりもさらに若いイワシになります。シラス網を行う時期は12月で、この時期のシラスのことを寒シラスと呼んでいました。シラス網はアジア・太平洋戦争後には行わなくなってしまいました。

シラス網は船曳網になり、マカセ網と同じような構造になります。フクロにはカンタ(写真1)がつき、オアミとナアミにはアンバがつきます。裾にはヤキイヤという陶製の沈子がつきました。シラスを捕らえるフクロの網目は3mmほどの細かい網目ですが、ナアミの網目は1尺5寸(約45cm)～7寸(約21cm)、オアミの網目は3寸5分(約11cm)ほどの大きさで、シラスがすり抜けてしまうほどの大きな網目です。この大きな網目でもシラスは網におびえて近づけないので、ナアミでシラスを挟んで船で曳いていけばフクロに追い込むことができるため、十分な効果がありました。  
※漁師が使う1間=5尺で約1.5m

(話：金指 貢氏 昭和5年生まれ 沼津市三津在住)

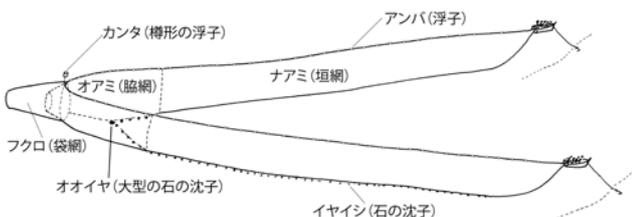


図1：カイラ網  
(沼津市歴史民俗資料館編『沼津静浦の民俗』P39  
オンド網図に加筆)



写真1：シラス網のカンタ 直径350mm×高320mm  
(沼津市歴史民俗資料館所蔵)

## 地図から見た沼津① 蛇松と永明寺

加藤 雅功

さまざまな地図を通して、沼津の自然・歴史ならびに地域の変容を広く紹介していきたくと思います。新旧の絵図や地籍図、刊行された地形図や各種の地図類は視覚的に親しみ易く、理解が容易で、郷土を知るには大変役に立つものです。

今回は、資料館所蔵の文化3年（1806）の「本町絵図」から狩野川河口の右岸に着目してみます。

**蛇松** 「蛇松線」は、東海道本線の建設に伴う資材運搬の支線として建設され、狩野川右岸の河畔にあった、蛇のようにくねった特異な樹形の「蛇松」に由来して命名されたものです。狩野川河川敷にある通称「一本松」を蛇松と誤解する人もいますが、この松は石碑に記されているように、川での施餓鬼供養の場所であり、明治期の新しい松と見られます。

祖父が青年団の代表として舟で下河原（一時は港町）から我入道に渡った話を思い出します。御用邸に向う皇后陛下（昭憲皇太后）を案内する名譽な役で、川を下る途中、蓼原の一本松の岸辺に立寄ったそうです。

狩野川に架かる「港大橋」の北側で、廃線後に整備された蛇松緑道の東南端にある「蛇松広場」付近が元々の地名の「蛇松」の地であり、後に「蛇松町」の町名も誕生しました。

なお、蛇松線開通時に蛇松が切り倒されたという説もありますが間違いであると思います。また、浮世絵



文化3年 本町絵図（南東部分）



本町絵図部分（蛇松・蓼原道・永明寺領畑）

に描かれた蛇松も「田子の浦」側で、位置的には興津か清見寺のある清見瀧付近が想定されます。別に千本松原の標記もあり、遙か遠くに千本松原を望む地と思われます。松の変形樹は各地に散見され、沼津の蛇松であるという確証は得られません。

祖父から聞いた独立樹の蛇松の位置は、公園北東側にあった旧製材所の建物の南部であり、その跡地には沼津魚仲買商組合の共同集配所があります。蛇松線の建設に携わった曾祖父からの伝承は、蛇松線の敷設時には伐採されず、乏水地ゆえにその後枯れたことをうかがわせます。

絵図（地籍図）では、我入道の渡し場に向う「蓼原道」のほか、松林の松が描かれる中に、小さな文字ながらも同じところに蛇松（蛇松）と記されています。また、明治中期の堤防のない時期に描画した二万分の一の地形図にも、南側の山神社付近まで洪水制御の松林が細長く伸びており、河畔には南側から専用の堀が掘削され、現地調達が出来たバラス（バラスト＝砂利）のほか、枕木の用材などが陸揚げされていました。

**蛇松と永明寺** 一方、下河原の蛇松（地名）にあった「永明寺」は、慶長16年（1611）の大洪水で堂宇が流失しました。さらに、万治2年（1660）には再び伽藍が流失してしまいました。永明寺は古くは沼津本町の下河原にあり、万治2年の「亥の満水」による被害が甚大であったため、出口町（現幸町）に移転した経緯があります。ただし、寺地が元々何処にあったのか知る人は誰もいません。

一時期、現在の蛇松町側に想定しましたが、その可能性は薄く、現在の共同集配所の北側には60年以上前でも湿地が広がっていました。絵図でも帯状の水田が下河原の集落南部まで延び、狩野川の旧河道の窪地が永明寺領の田畑となっていたことがわかります。東側の河川沿いは微高地ですが狭小で、寺院の立地には無理があります。より西側には水掛りの悪い畑地が広がりますが、寺地の遺構らしきものは見られません。



文化3年本町絵図（北東部分）

下河原には、北から妙海寺（中の寺）、妙覚寺（下の寺）が川沿いの旧道に向いて境内地を並べていました。西には小字天王小路付近に天王社が、河畔には第六天社（現川辺神社）がありました。その南側は下河原街出口で、沼津宿の南見付の跡であり、出口町の西見付と町名の由来が重なります。鉤の手に曲がる道沿いには

川に張り出す稲荷瀬に新玉稲荷神社<sup>あらたまいなり</sup>がありました。稲荷神社から川沿いは御林で、蛇松まで洪水制御を目的とした御料林であったこともわかります。また、西に延びる狐道<sup>きつねみち</sup>や塞ノ神道<sup>さいのかみ</sup>が古絵図に描かれています。

より注目すべきは、境内を囲む屋敷垣です。西の風が強い地域であり暴風のため西側が顕著です。漁場のある千本浜への浜道で、用水路が沿う作り道の狐道の先にかつてはキツネも潜んでいたといえます。実はこの狐道を挟んだ南側に特異な矩形の屋敷垣で囲まれた空閑地が絵図には描かれています。

一般にその形状から居館跡として、地元で言う「船大将<sup>ふなたいしょう</sup>」の屋敷跡が疑われます。小字名は「囲」であり、一部に水路が巡り、中世の館跡が推定されます。周囲より一段高い壇状部が残り、かつて一部に石垣の遺構も見られました。「ヤブコン」という屋号の家もありましたが、藪のある囲い（コン）の意でしょう。筆者の家もその一面に位置していますが、区画整理事業により古い形態や遺構はすでに消失しています。

今のところ、「船倉<sup>ふなぐら</sup>」の小字名が残っていたスルガマリーナ付近が流失した初期の「蛇松の永明寺」の可能性が高いと思います。自然堤防の微高地に蛇松の松林で守られていた寺地があり、背後の低湿地が後に永明寺の領地になったとすると合理的です。その後、土塁で囲まれた館跡の「下河原の永明寺」に移転してから万治の「亥の満水」で壊滅的な状況に置かれたと考えられます。なお、史料面での裏づけがなく不確実ですが、最初から館跡に継続的に堂宇を構築し、墓地を東側に求めていたとしても不思議ではありません。

## 資料館からのお知らせ

### 企画展を終了しました



企画展の様子

5月7日をもって企画展「江梨歳時記～写された海辺のくらし～」を終了しました。懐かしい写真が展示されていることで、多数の地元の皆さんの来館をいただきました。写真を提供していただいた川上貢さん、杉山榮一さんに深く感謝いたします。

### 沼津市歴史民俗資料館だより

2017. 6. 25 発行 Vol. 42 No. 1 (通巻214号)

編集・発行 〒410-0822 沼津市下香貫島郷2802-1

沼津御用邸記念公園内

沼津市歴史民俗資料館 TEL 055-932-6266

FAX 055-934-2436

URL <http://www.city.numazu.shizuoka.jp/kurashi/shisetsu/rekishiminzoku/index.htm>

E-mail: [cul-rekimin@city.numazu.lg.jp](mailto:cul-rekimin@city.numazu.lg.jp)